

古代エジプトの犬神

加 藤 一 朗

貝塚茂樹教授は「古代殷帝国」(1958, 97頁以下) および「世界の歴史」第1巻(中央公論社, 1960, 86頁以下)の中で、中国殷時代の墓の底につくられた腰坑から犬や犬をつれた武装兵士の骨が出土したことについてのべ、犬が主人とともに葬られたのは、現世でもっとも主人に忠実な家畜であった犬に死後の世界で主人をわるい霊からまもらせるため、または黄泉に主人の魂をみちびかせるためと解釈している。

また井本英一氏は「Videvdat 8. 1—19の注解」(広島大学文学部紀要第22巻3号, 1963, 261頁—286頁)の中で、古代イランを中心として、死者の葬送と犬との密接な関係、とくに犬と穀物霊との関係を刻明に論じている。古代中国や古代イランと同様、古代エジプト人の間でも、死者の埋葬に犬が重要な役割を果たしていたようである。このことは犬神の信仰から推定される。

エジプトの神々の名はほとんどすべて埋葬文書 *Funerary Texts* (ピラミッド・テキスト, コフィン・テキスト, 死者の書など) にでてくる。しかし、これはエジプト人が現世と来世との間に明確な1線を描いていない結果であって、これらの多くの神々が冥界、または死者の埋葬ととくに深い関係をもっていたということにはならない。もちろんエジプトでは神々の間に混淆が盛んで、時代がさがればさがるほど、各神々の属性は複雑となり、神々の中にはその属性の一つとして、冥界に特有の何らかの役割を果たすようになったものも少なくない。しかし、本来的に死者の神であったかどうかという点になると疑わしいものが多い。

例えば死者の書の挿絵にみられるオシリスの裁判の図にはオシリス、マアト、トト、アヌビスの諸神がえがかれている。オシリスの立姿の前に天秤がおかれ、犬神アヌビスは裁判官オシリスの命で天秤を操作しているようにみられる。秤の一方の皿には死者の心臓(または死者自身)がのせられ、他方には真理の女神マアト(またはその象徴の羽毛)がのせられている。知識の神トトは傍で測定の結果を記帳している。このように冥界の入口で重要な役割を果たしている神々といえども、その活動がとくに死者と関係

古代エジプトの犬神

が深いとはいえない。マアトは真理の女神として、「真理」の追求される場所にはいずこにも居合わせなければならない。知識の神トトの活動も同様に冥界にはかぎられない。オシリス神も例外ではない。この神は死者の王、冥界の裁判官であると同時に、(宇宙をすべる) 大神、またナイルの神、穀物の神としては、必ずしもその活動が冥界にかぎられていない。

しかし、オシリスが王朝時代を通じて、死者ときわめて密接な関係にあったことはいふまでもない。神々の系譜によれば、オシリスは王の化身であるホルス(タカ)神の父、すなわち物故せる先王で、また死者の王、西方¹⁾にすむ第一の者である。オシリス神話にしたがって、代々の王は死後ひとしくオシリスとなると考えられ、この風はしだいに一般人にも模倣されて、中王国時代にはすでに王族以外のものも死後オシリス神となって神々の永遠の世界に入りうると考えられるようになり、さらに死者の書のつくられた新王国時代には、オシリス自身の裁判をうけて、誰彼の別なくオシリス神となるという思想が普及した。中王国以降民間にはオシリス信仰が盛んで、聖地アビドスには巡礼があとをたたく、この神をたよりとしてこの地に死者の供養碑が無数にたてられたのも理由のないことではない。

こう見てくるなら、エジプトの神々の中でオシリス神ほど死者にとって重要な神はなかったようにおもわれる。民間信仰に関するかぎり、中王国以降は事実そうであった。しかし、この神とても本来死者の神、冥界の主であったかどうかは疑わしい。筆者はこの神がエジプトでは比較的新らしい神、すなわち古王国時代の半にエジプトに入った外来の神であるという説にはくみしないけれども、この神が先王朝時代から死者の神として信仰されていたかどうかには疑いをもつ。なぜなら、オシリスは文献にまず死後の「王」、死者の「王」として現われるからである。最初から「王」(nsw)という概念とむすびついていることは、ナイルの谷間にいまだ王の存在しなかった先王朝時代には、このような神、つまり「死者の王としてのオシリス神」は存在しなかった筈だからである。

それならばエジプトで本来死者の神、冥界の主は何という神であったろうか。先覚、たとえばブレストッドなど²⁾も指摘しているように、それは、上記オシリスの裁判の図の中で説明を残してきた犬神アヌビスであったと考えられる。王朝時代の初めオシリス神によって冥界の主の座を奪われてのち、この神はオシリス神につかえる冥界の1柱の神に甘んじる。新王国時代の死者の書の挿絵や墳墓の壁画によれば「天秤を計るもの」、「ミイラをつくるもの」として描かれ、死者の書の文中にももっぱら死者の保護者

として記されている。神々の混淆がはげしく、タカ神はファラオ（王）の化身として、また甲虫（ケプリ）神は太陽神と結合して、はなばなしい神の座をえたのに対して、この犬神アヌビスは、珍らしく他の神々と混淆することも少なく、一貫して冥界にあって地味な役割を果す。このような点にこそ、本来死者の神であったアヌビスの真の姿が反映しているのではあるまいか。オシリス神話の中で、アヌビスはオシリスのミイラをつくる役をつとめている。このようなところにも、冥界の神としてアヌビスの方がオシリスよりも古いことが、象徴的にあらわされてはいまいか。

パレルモ・ストーンでは、第1王朝の？王の治世？年の欄に、「ホルスの崇拜」という言葉とならんで、「アヌビスの誕生」という文字が刻まれている。これが儀式の名と考えられる以外、内容は不明であるが、アヌビスが非常に古い神の1柱であることの証左になる。

またピラミッド・テキストでは、「王の与える供物、アヌビスの与える供物」(Pyr. 806) という言葉にみられるように、王とならんで死者に供物を与える役割を果しており、またしばしばアヌビスと同形のヒエログリフ（「腹ばう犬」の姿³⁾）が「西方にすむ第1の者 (hnty. imntyw)」(Pyr. 745 a 他)、つまり「冥界の主」という語の決定詞にもちいられている。アヌビスの名と「西方にすむ第1のもの」という名といずれが古いにせよ、エジプトの死者の神は本来「腹ばう姿であらわされる犬神」であったと結論してよろしいであろう。オシリスがおなじく西方にすむ第1の者とよばれるようになったのはのちのことで、この座をオシリスがアヌビスから奪ったものと考えられる。

ピラミッド・テキストではこの犬の坐姿の他に「旗竿の上に立つ犬」のヒエログリフがみられる。これはウェプワウェト (Wpwꜣwt) とよばれる神である。この神の名は「道を開く」という意味である。中王国時代にはアヌビス神との間に混淆がおこり、死者の神となり、「墓所の主」とよばれている。「道を開く」といういみからすると、いかにも死者の先達として、本来的に死者の神であったようにとられやすいが、この点は疑わしい。なぜなら、エジプト第1王朝建設の記念碑と考えられるナルメルのパレット（表面）では、この立姿の犬をのせた旗竿が、他の3本の旗竿とともに、王の討征の先導をつとめているからである。この神は本来生前の王のために進路を示す神ではなかったか。いずれにしてもこのウェプワウェト神と王との関係は緊密であったようで、ピラミッド・テキストの中ではしばしば、オシリス神同様に、この神の名が王名と同格に用いられている。

古代エジプトの犬神

あ と が き

この小稿は本誌前号の中原与茂九郎先生退官記念号に寄稿するつもりで、期日切迫のなかを急いでまとめたものですが、ついにまにあわず、本号に——しかも当初執筆のままで——掲載をおねがいすることとなりました。先生に献ずるきもちのいまもかわらないことを、ここに付記いたします。

(筆者は関西大学助教授)

註

- 1) エジプト人は天の一角、もしくは西方を死者のいこう永遠の地と考えていた。
- 2) J. H. Breasted: *Development of Religion and Thought in Ancient Egypt*, 1912, p. 100. また J. Černý: *Ancient Egyptian Religion*, 1952, p. 22 参照。
- 3) また「塔門風の建物の上に腹ぼう犬」の形もある。この建物が、棺または墓をあらわすとすれば、犬神は死者の上に腹ばいになって、死者の書にのべられているように「死者を保護する者」にふさわしい姿勢である。また古王国の一例として、儀式用の玩具風にかかれたアヌビスのヒエログリフが残存している。これでは頭部が黄色に、形式化された体は茶色にかかれ、口から舌をだしている。これらのヒエログリフの発音はいずれも *inpw*、語義は不明である。アヌビス Anubis はギリシア名にもとづく近代ヨーロッパ語の名である。